

MUSASHINO^{Vol.106} *for* TOMORROW

巻 頭

まだ、夢の途中

吉田沙保里

卒業生インタビュー

お客様の
笑顔のために

吉金寛文

海外音楽事情

彩りに満ちた
私の音楽人生

カールマン・ベルケシュ

表紙：クリストファー・マーティン
(トランペット/シカゴ交響楽団 首席奏者)

July 2013
vol.106



写真提供＝日本レスリング協会

まだ、 夢の途中

吉田沙保里 (女子レスリング 55kg 級)

記憶に新しい2012年ロンドンオリンピック。決勝でカナダのバービック選手を下し、アテネ、北京につづいてオリンピック3連覇を達成。そして、その後の世界選手権も制して10連覇。世界大会（オリンピック＆世界選手権）13連覇は、まさに前人未踏の大記録。こうした功績が評価されて、国民栄誉賞を授与された女子レスリングの吉田沙保里選手。これだけの栄誉を手にした今もなお、“無敵の女王”はさらなる夢、目標に向かって邁進



吉田沙保里 Saori Yoshida

1982年、三重県生まれ。女子レスリング選手（55kg級）。元日本王者の父・栄勝氏の指導で3歳からレスリングを始め、県立久居高等学校から中京女子大学（現：至学館大学）に進む。'00年、'01年世界ジュニア選手権（58kg級）連覇。'04年アテネ、'08年北京、開会式で旗手を務めた'12年ロンドンとオリンピック3連覇。'01年から'08年まで公式戦119連勝。ロンドンオリンピック直後の世界選手権でも10連覇を記録し、世界大会（オリンピック＆世界選手権）13連覇という前人未踏の大記録（ギネス記録認定）を達成。この功績を称え'12年11月7日に日本政府より国民栄誉賞が授与された。鋭いタックルを得意とする。現 ALSOK 所属。

しています。ご本人に加え、大学時代からの恩師である栄 和人監督（日本レスリング協会女子監督・至学館大学教授）にもお話をうかがいました。（2013年4月27日取材、文責編集部）

3歳から始めたレスリング

吉田選手の父、栄勝さんはレスリングの元日本チャンピオン。自宅で道場を開いており、3歳のとき、二人の兄と同じように自然にレスリングを始めた。父の指導はとにかくスパルタ。タックルの練習に明け暮れる毎日だった。

吉田「厳しかったですね。正月、大晦日以外は毎日練習。土、日も出稽古か試合。小さな頃は何度もやめたいと思いましたが、母に話すと、『お父さんに言いなさい』。でも、怖くて父にはどうしても言い出せず、結局いつも『じゃあ頑張る』で終わりました」

男の子に混じって試合に出るようになって力をつけていくなか、中学の頃から本気で取り組む覚悟を決め次第に頭角を現していく。栄監督と最初に出会ったのは高校時代、栄監督が当時コーチとして一緒に遠征した国際大会のときだった。

栄「彼女を見てまず感じたのは、レスリングを楽しそうにやっているなということ。スピードも技術も、あの世代の中では飛び抜けていました」

高校卒業後は、父の勧めもあり、栄監督が指導するレスリングの名門・

中京女子大学（現在は至学館大学）へ進学。社会人となって以後も、二人の師弟関係はずっとつづいている。

練習に取り組む姿勢

現在も吉田選手は至学館大学を拠点として、レスリング部の学生たちと一緒に日々練習に励んでいる。ひとまわり違う若い世代の選手と同じ内容のトレーニングをこなすばかりか、何事も率先して行い後輩たちを鼓舞しているという。

吉田「学生に負けないという気持ちで、どんな練習でも先頭に立ってやっています。『私を何歳だと思ってんの。私ができるんだから、みんなもできるはず』って叱咤激励しながら。レスリングを始めて20数年になります。が、タックル、スパーリングという基礎的な練習は毎日同じ。やらないといけない基本ですから。ただ、筋力を付けたりする反復的なトレーニングがいつも同じだと飽きてしまうので、強弱を付けたり、やり方を変えるなど工夫するようにしています」

栄「吉田沙保里が居る、居ないで、場の雰囲気はまったく違いますね。年齢、実績を重ねるなかで、今は彼女の存在そのものが後輩の良い目標。現在の彼女の立場なら、自分のペースで練習内容、練習プランを決めることもできるわけですが、そうしたなかでも『やるときはやる』という態度は後輩たちの見本になっており、な

かばコーチ的な役割も担ってもらっています」

あのメダルが欲しい

「勝ってあたりまえ」、誰もがそういった目で吉田選手の試合を見る。過剰なほどの期待や応援は、時としてプレッシャーになるような気がするが、吉田選手は「まったく重圧にはならないですね。国民の皆さんに期待してもらって、嬉しいです」と事も無げにいう。

しかし、さすがの吉田選手も、3連覇が掛かったロンドンオリンピックの試合直前には、緊張と不安で眠れず、コンディションは最悪だった。栄監督もそんな彼女の状態を見て、「今回はダメかもしれない」と心配し、食欲不振から体重が3キロも減ったという。ところが試合の結果は周知のとおり、4試合戦って1ポイントも落とさない完全優勝だった。

吉田「私の試合の前日、48kg級の小原日登美選手と63kg級の伊調馨選手が共に優勝し、それを見て号泣しました。その日の夜遅く、テレビ局まわりをした二人が宿舎に戻ってきて、金メダルを見せてもらったんです。大きくて、重くて、その瞬間、『私もこのメダルが欲しい』と心から思いました。素直な気持ちは、5歳のときに感じたものと同じ。初めて出場した大会で、優勝した男の子を見て、父に『私も金メダルが欲しい』とねだっ

たら、『あのメダルは頑張った子しかもらえないんだよ』と。あのときも今も、気持ちは何も変わらない。そう思うと、何か吹っ切れてラクになった気がしました。二人が優勝できたんだから、私もできる。何のために苦しい練習に耐え、頑張ってきたんだ、やるしかない。そんなふうに、腹をくくって試合に臨むことができました」

強さの秘密

数々の記録を打ち立て、無敵の女王として君臨する吉田選手。ご自身に、強さの秘密をお聞きすると、「負けず嫌いだから」とあっさり。レスリングに限らず、遊びのゲームでも負けるのは絶対イヤだという。さらに、世界大会13連覇の偉業は、大きなケガをしなかったことの証でもある。ケガ回避能力は天性のものなのだろうか。

吉田「この体勢でいたら危ないとか、ここで手をついたら危ないというのは、自然に分かりますね。あと、あまりに体力差のある相手と長時間練習するのはケガの元ですので、気を付けています」

栄「彼女を見ていると、お父さんの練習方法からケガをしない動きを身に

付けたんだと思います。止まっていた受けとめると、どうしてもケガをしやすい。動きの中でのレスリングを重視してきたことが、ケガの少ない理由じゃないでしょうか。基本を



▲ ロンドン五輪の表彰式で金メダルを掲げる吉田選手
(写真提供=日本レスリング協会)

小さな頃からたたき込まれたことが大きいと思いますね」

さらに、オンとオフの切り替えの上手さ、常に自然体なことも吉田選手の特徴のように思われる。ストイックに24時間ずっと競技のことだけを考えている選手もいるが、吉田選手はだいぶ違うようだ。

吉田「もちろん、練習の時はすごく集中します。でも、レスリングのことを考えるのは、レスリングをしているときだけ。食事にはあまりこだわらないし、お酒も飲むし、競技を離れたら好きなことをしています。小さな頃からの性格なのかもしれませんが、ありのまま、自然のままに生きたいんです。だから、ストレスは全然溜まりません。逆に『ストレスって何?』という感じ。ストレスだらけの監督とは正反対です(笑)」

敗戦から学ぶ

小・中学生時代、多くの大会を制した吉田選手だったが、高校になり最大のライバルが現れる。2学年上の山本聖子選手だ。日本人離れしたパワーを持つ彼女に幾度となく苦杯を喫し、どうしたら勝てるだろうかと考え練習を重ねるうち、外国人にも負けない力強さを磨いていった。そして



▲ 栄 和人監督



▲ ロンドン五輪を制し、父・栄勝さんを肩車してガッツポーズ (写真提供=日本レスリング協会)

2001年12月、全日本選手権の準決勝で山本選手に最後に負けた次の試合(3位決定戦)から現在に至るまで、公式戦での敗戦は僅か2度のみ。ほとんど負けを知らない吉田選手だが、119連勝、58連勝をストップされたときには人目をはばからず泣いた。「あんな悔しい思いは二度としたくない」と己を奮い立たすため、「吉田が負けた」という新聞記事を額に入れて部屋に飾った。敗戦は大切なことを教えてくれた。

吉田「こんな負けず嫌いですから、負

ければ悔しいし、どうして負けたんだろうと突き詰めて考えます。勝っているときには分からないものを、負けたときに知るということはありますね。連勝を阻止されたのは外国人なんです。以前戦ったことがあり、そのときは楽勝していて今回も大丈夫だろうという安心感があったんです。技的には自分が攻め、それを返されてという感じの敗戦でした。つまり、勝てるだろうという気の緩み、油断が敗因。実はすごく昔もあったんです。絶対勝てると思っていた相手との対戦前、客席の友達に『頑張るよ』とピースサインなんかしてしまって。負けたあと、父にひどく叱られました」

栄「私は、吉田に関して勘違いをしていました。負けて涙を流したのに、そのあと何も変わっていない、そんなふうに感じていました。私ひとりがイライラしたり、胃が痛くなったり…。でもよくよく見ると、敗戦を糧にして、彼女なりに作戦や対応策をしっかり立てているのが分かるんです。

アドバイスなども一見聞き流しているように見えて、全部覚えていて、吸収している。芯は、責任感があって真面目なんですね」

ピアノへの憧れ

カラオケには良く行くし、試合前には大好きなアイドルグループの歌を聴いて元気をもらおうという吉田選手。音楽が好きな彼女は、かつてピアノを習いたいと強く思ったこともあるそうだ。

吉田「小学生時代、幼馴染みの所に遊びに行ったとき、ピアノを習っていた彼女が目の前で弾いてくれたんです。とっても上手で、めっちゃめっちゃ感動して、カッコイイなって。そのとき彼女に指の運びだけ教えてもらって、そうしたらそれなりに弾けたんです。見ただけでこれだけできるんだから、楽譜が読めるようになったら絶対うまく弾けるようになるって思いましたね。で、家に帰って父に『ピアノを

❖❖❖❖❖ 音楽学部新人演奏会 ～平成24年度卒業生による～ ❖❖❖❖❖

平成 25 年 4 月 17 日 津田ホール



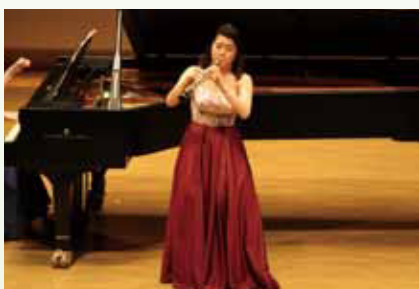
小原史織(打楽器)



本田直也(コントラバス)



古城和貴(ピアノ)



谷澤 遥(オーボエ)



川口真貴子(メゾ・ソプラノ)



清水弘治(ピアノ)

習いたい』って告げると、父はたった一言『ピアノが弾けても強くならん!』。これでおしまい。でも、いま部屋にピアノがあるんです。未だに楽譜は読めないの、『エリーゼのために』など覚えている曲のさわりをちょっと弾くだけなんですけれど」

さらなる夢に向かって

武蔵野音楽大学では「音楽芸術の研鑽」と共に「人間形成」を教育方針に掲げているが、栄監督も「人間性の向上」を選手に求めているという。

栄「生活全般に関して、だらしなかったり、いい加減だったりすることは、人間付き合いにおいても、何事かを成す場合にも必ず障害になると思います。武蔵野音大の3P主義のように、清潔にする、時間を守る、礼儀、そうしたことは選手云々ではなく人間としての基本でしょう。吉田の場合は、ご両親に厳しくしつけられたせいか、最初から身に付いていましたね」

吉田「必ず目を見て挨拶する、脱いだ後の靴の並べ方、食事した後の食器の片付けなど、常に注意されていました。父の道場には『日常の心』という教訓が掲げてあり、今でも練習の後には『はいと言う素直な心』『すみませんと言う反省の心』などと皆で読み上げています。監督が言うように、こうしたことは基本だと思います。性格や人間性はレスリングにもそのまま出ますから、基本ができない人、適当な人は強くなれません」

吉田選手の座右の銘は「夢は大きく、常に向上心を」。ご自身がまだ夢の途中だという吉田選手から、武蔵野の学生たちに激励のメッセージをいただいた。

吉田「夢は絶対に持ったほうがいいし、目標が明確になるほど一歩ずつ確実に近づけると思います。それが無い

まま、ただ漫然とやっていると向上心は湧かないでしょう。小さくても、大きくても、とにかく夢を持ち、それに向かって諦めないで進んで欲しい。自分が決めたことに責任を持って、最後まで頑張りたいと思います。私にもまだまだ夢があります。さし当たっては9月にブダペストで開催される世界選手権での11連覇。その先には2016年リオデジャネイロオリンピックでのV4。そしてもっと先には、もちろん幸せな家庭を築きたいという夢も持っています」



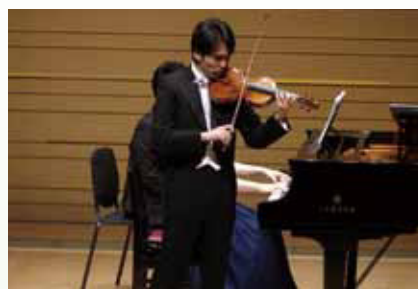
▲ 本学 福井直昭教授と一緒に

✧✧✧✧ 大学院修士課程新人演奏会 ～平成24年度修了生による～ ✧✧✧✧

平成 25 年 5 月 13 日 ヤマハホール



氏本 舞(ピアノ)



武井喜哉(ヴァイオリン)



濱 初帆(打楽器)



塚本正美(ソプラノ)



荒井茉莉奈(ピアノ)

卒業生インタビュー

お客様の笑顔のために

● 吉金寛文 ●

(公益財団法人新国立劇場運営財団 営業部 公演事業課 貸劇場担当主任)

新国立劇場は、オペラ、バレエ、現代舞踊、演劇等の現代舞台芸術を公演するための劇場として、東京都渋谷区に平成9年10月、オープンしました。この劇場には、オペラ劇場、中劇場、小劇場の3つがあり、多彩な舞台転換を可能とするなど最新の技術を駆使した設備が備えられ、演出には様々な工夫を凝らすことができる仕組みになっています。

主催公演の実施日を除いた日に限り、オペラ・バレエ・演劇・現代舞踊等の現代舞台芸術の公演に貸し出しています。その貸し出し業務の担当の一人が、本学卒業生の吉金さん。トランペットのプレイヤーをしていた吉金さんが、アートマネジメント、



吉金寛文 Hirofumi Yoshikane

1975年茨城県生まれ。佐野日本大学高等学校卒業。'99年、武蔵野音楽大学音楽学部器楽学科トランペット専攻卒業。第15回ヤマハ新人演奏会出演。第10回茨城の名手・名歌手たち演奏会オーディション合格、同コンサート出演。大学時代にトランペットを関山幸弘、タマーシュ・ヴェレンツェイの両氏に師事。現在、公益財団法人新国立劇場運営財団 営業部 公演事業課 貸劇場担当主任。

舞台を支える仕事に就いた経緯や、仕事の内容、やり甲斐などについてお話を伺いました。

(2013年5月13日取材、文責編集部)

最初はアルバイトから

—— まず、現在の仕事に至る経緯を教えてください。

吉金 武蔵野の先輩のツテで、大学時代から新国立劇場でアルバイトをしていました。卒業後はフリーでトランペットを吹きつつ、6年間ほど茨城県立水戸第三高等学校の音楽科で講師をしていました。時間があるときにアルバイトをし、のちに業務委託というカタチで劇場の仕事をさせてもらっていました。長く劇場の貸劇場業務に携わった経験や、複雑な料金体系をカバーしてコンピュータで簡単に計算できるものを構築したことが評価され、2年ほど前に職員になるべくご尽力をいただき、新国立劇場に採用されました。実はちょうどそのころ病気をしてトランペットが吹けなくなってしまっていたこともあり、決意したわけです。

—— 仕事内容は、具体的にどのようなことをなさっていますか。

吉金 施設利用の募集から、公演が終了して劇場を後にするところまでを担っています。新国立劇場では、主催公演で使用しない期間を外部に貸し出しています（昨年度ではオペラ劇場33日、中劇場118日、小劇場120

日）。いつ空いているのか告知して使ってもらえるように働きかけると共に、申し込みいただいたところを審査し、OKとなれば使用していただくことになります。設立目的が現代舞台芸術ですので、それに沿ったものであるということが大前提で、加えて内容が相応しいかどうか。そして日程を調整し、できるだけ多くの団体に使っていただくことを目指しています。使っていただける団体に対しては、劇場の使い方、お客様の誘導など公演ができるだけスムーズに行えるよう打合せをし、円滑にすすむよう努力しています。

—— 劇場の稼働率は？年間を通して埋まっているのでしょうか。

吉金 ほとんど埋まっていますね。ただ、劇場ですので短いスパンでの利用は難しく、ポツポツと空くことはあります。照明や音響を組んで、ゲネプロをやって、本番をやって、バラして、とまでなると1日ではなかなか難しいですから。



▲ 新国立劇場の外観

難しさとやり甲斐

——仕事の難しさ、大変さは？

吉金 初めて劇場を使う団体の場合、通常のコンサートホールで来られるケースが多々あります。ホールと違いあくまで劇場ですから、例えば明かりなど、専門の照明さんを雇ってもらって一からプランを考えていただくことになります。その辺のギャップを埋めるのに苦労することがあります。あと、保全ですね。国の施設ですから、丁寧に使っていたということに配慮しています。私自身が演奏家として色々なホールに出演した際に、「あれはダメ」「これもダメ」と結構冷たく言われた経験があるので、ストレートに伝えるのではなく、あくまで「お客様」に対する態度としてソフトにお願いするようにしています。また技術さんとお客様の中間にいるような立場ですので、両方に気を配りつつ、全体がスムーズに運ぶような役割も求められます。

——逆に喜び、やり甲斐は？

吉金 一度利用した団体から「また使いたいんですけど」とお話が来たり、名指しで依頼されれば光栄ですし、やはり満席になれば嬉しいですね。そして、何より励みになるのが、公演が終わったあとのお客様の笑顔。楽しそうにその日の公演の内容を話題にしながら帰って行かれるのを見るたびに、この仕事のやり甲斐を感じます。もっと頑張ろうというモチベーションにもつながります。

武蔵野時代を ふりかえって

——どんな大学生活でしたか？

吉金 基本的に楽器の練習と演奏会をたくさん聴きに行っていたと思います。4年生のときに学友会の委員長

とミュージックフェスティバル、卒業記念行事の実行委員長をやったことも良い思い出です。様々な演奏会にも出ました。恩師の関山幸弘先生がNHK交響楽団のメンバーということで、エキストラで呼んでもらって出演したこともあります。

——武蔵野で学んだこと、経験したことで、現在役に立っていることは？

吉金 やはり一番は生活規範の部分。3P主義の礼儀、清潔、時間厳守ですね。大学4年間で染みつきましたから、意識しなくても自然と実践しています。どこで働くにしても、これは必要なことだと思います。また武蔵野は先輩・後輩の絆が強いのが特徴。もと私は人見知りするほうだったのですが、あるとき先輩から「そんなことじゃ仕事はもらえないよ」と言われて。それ以後、飲み屋でも何処でも連れていってもらって、徐々に話せるようになりました。今の仕事は、ある意味コミュニケーションがメインですから、非常に助かっています。大学卒業後、先輩から仕事を紹介してもらうことも多く、現場でも可愛がってもらいました。

時代を掴む、 ビジョンを持つ

——吉金さんと同じアートマネジメントの道を目指す学生の皆さんは、どのような心構えが必要でしょうか。

吉金 私自身まだ経験が浅いので大したことは言えませんが、音楽だけの知識だけでは不十分です。劇場の場合は、音楽以外に演劇や舞踏への造詣も深いに越したことはありませんし、時代の流れに敏感になる、時代に沿うという部分も必要です。最近、



▲ オペラ劇場 日本初の四面舞台を持つ、総客席数は1,814

メトロポリタン歌劇場だと「ライブビューイング」、ベルリンフィルだと「ストリーミング配信のコンサート」など新たな試みも始まっています。歌舞伎でも、新国立劇場で市川團十郎がオペラ「鳴神／俊寛」の演出をしたり、亡くなった中村勘三郎の移動劇場など、新しいことに積極的に取り組んでいます。新しいことに対して興味を幅を広げ、勉強していってほしいですね。時代はどんどん進んでいますから、アンテナを全方位的に張り、興味を持ったら掘り下げるというスタンスが大事だと思います。

——このところ就職に関しては難しい時代がつづいていますが、何か感じることはありますか。

吉金 学生の多くは、「就職しなきゃ」ということで就職活動をしているように思われます。就職した後のビジョンがないばかりに、すぐに辞めてしまうというケースも多いのではない



でしょうか。「まず就職する」ではなく、「就職して、こういうことをする」という目標があるべきです。大学も同じ。大学に入ることを目標にするのではなく、入って何を学びたいかという部分で大学を選ぶことが大切だと思います。私の場合は、高校時代から演奏家になりたいという夢があり、そのビジョンに沿って武蔵野を選んだわけです。大学卒業を前にした私は「オーケストラで吹きたい」、ただそれだけでした。「なりたい」ではなく、「なるぞ!」という強い決意でした。新国立劇場で働くことになった時も、就職が目標ではなく、ここで何をしたいのかと考えていました。



▲ バレエの衣装を展示した劇場ホワイエ

何ひとつ 無駄な経験はない

—— 武蔵野の後輩にメッセージをお願いします。

吉金 皆さんに一番伝えたいのは、何をしても無駄なことはないということ。私自身、プレイヤーの道を断念せざるを得ずとても辛かったです。その経験から舞台に立つ人の心理がわかり、フォローの面で大いに助かっています。河川的设计事務所ではアルバイトをした際に身に付けたデザインソフトのスキルも、現在、パソコン作業をするうえで欠かせないものとなっています。どんな知識も、どんな技術も、いつか必ず役に立つときが来る、そう信じてあらゆることに挑戦し経験を積んで欲しいと思います。働きだすと、学生時代にあれを勉強しておけば良かった、あの授業をもう少ししっかり聞いておけば良かった、と思うことも度々です。必要になったときに初めて分かることですが、学んでおいて無駄なことは一つもありません。

それと演奏会や舞台には積極的に行って欲しいですね。演奏家になる



▲ 本学江古田キャンパスの正門にて

人も、アートマネジメントをする人も、生に接するのは非常に大切だと思います。私も演奏家だった時には、レッスンに匹敵するほど参考になりました。現在の仕事に就く際も、演奏はもちろん照明や音響、衣装に大変感銘を受けました。なにより楽しいです。新国立劇場ではたくさんの公演がありますので、ぜひ足を運んでみてください。学生の皆さんには、お得なチケットもありますよ。

—— 最後に吉金さんご自身の今後の抱負をお聞かせください。

吉金 いま現在は貸劇場の担当ですが、組織ですのでいつかは異動があるでしょう。新しい部署で自分に何ができるのか、期待の方が大きいですね。どの部署というのではなく、制作も技術もやってみたいし、すべて一通り経験してみたいと思っています。

音楽の万華鏡 23

もう一つの記念年

今年は、ワーグナーとヴェルディ生誕200年の話題があまりに大きく、そのほかの記念年は隠れてしまいがちですが、記念年を機にその仕事を改めて思い起こしたくなる作曲家がいます。その一例が、今年、生誕100年を迎えるイギリスのベンジャミン・ブリテン(1913-76)と、ポーランドのヴィトルト・ルトスワフスキ(1913-94)です。ブリテンは1930年代に国際現代音楽協会主催の音楽祭で作品が演奏されてデビューし、その後は、《ピーター・グライムズ》(1945)、《ねじの回転》(1954)

などのオペラの傑作を発表します。しかし、新しい音響や作曲理論に関心を向ける第二次大戦後の作曲界の動向の中では、オペラを本領とする保守的な作曲家として語られる傾向にあるように思います。

ルトスワフスキは、1956年に始まる「ワルシャワの秋」音楽祭で、それまで溜まっていた前衛的な表現への衝動が一挙に噴出するような作品を発表します。その作品は、不協和な響きや、突発的で衝撃的なアクセント、野性の動物のようにすばやく動くパッセージ、瞬時に駆け抜ける多声的なテクスチュアなど、現代音楽の響き、と言いたくなる要素が支配しているのですが、複雑で難解といった印象はなく、音によるドラマが繰り広げられるのを見よう。ルトスワフスキの《ピアノ協奏曲》(1987)の、翳りのある半音階の響きはショパンを

想起させる、と言う人もいます。

ブリテンとルトスワフスキに共通するのは、調性音楽が備えていた音言語で思考している点です。調性音楽から類推できる響きから、それを超える響きまでを駆使して、聴き手を引き込んでいきます。保守的とか新古典主義の語は二人の音楽には適切ではなく、自分の言葉で語る、という時の自身の音言語で想像世界を伸びやかに繰り広げる音楽です。ワーグナーとヴェルディの音楽には、それぞれドイツとイタリアの音言語が反映されているように、イギリスとポーランドの音言語が音楽の個性化を促しているブリテンとルトスワフスキの作品に改めて耳を傾けたいと思います。

榎崎洋子(本学音楽学教授)

彩りに満ちた私の音楽人生

●カールマン・ベルケシュ教授(クラリネット・指揮)●

武蔵野音楽大学の客員教授として1992年に着任して以来、21年にわたり本学でクラリネット、室内楽やオーケストラの指導に当たられているカールマン・ベルケシュ教授。ハンガリー、ジュール市のジュール・フィルハーモニー管弦楽団の芸術監督としても活躍されていますが、このたび、これまでの卓越した音楽活動が認められ、本年3月母国ハンガリーにおいて政府などから名誉ある賞を



カールマン・ベルケシュ

Kálmán Berkes

ハンガリー出身のクラリネット奏者、指揮者。ジュネーヴ国際コンクール・クラリネット部門でシルバーメダルを受賞したほか、『グラミー賞』の室内楽部門でノミネートされゴールドメダルを受賞。1972年よりハンガリー国立歌劇場管弦楽団、ブダペスト・フィルハーモニー管弦楽団、'83年にブダペスト祝祭管弦楽団の首席奏者を歴任。'82年にはブダペスト・ウィンド・アンサンブルを創立し、芸術監督に就任。現在までに世界各国で演奏活動やレコーディングを行っている。また'87年からは指揮者としての活動を始め、ハンガリー国立フィル等欧米各地のオーケストラより客員指揮者として招聘されている。'09年ジュール・フィルハーモニー管弦楽団芸術監督に就任。現在、武蔵野音楽大学客員教授。

3つ同時に受賞されました。先生の少年期からこれまでの活動、交友、そして武蔵野との関わりなどについて、先生と数多く共演している本学・福井直昭教授がお話を伺いました。

(2013年5月8日インタビュー)

ハンガリーの 栄えある3賞を同時受賞

福井 まずはお誕生日おめでとうございます(収録日はベルケシュ先生61歳の誕生日)。特にプレゼントは持ってきていませんので(笑)、その代わりといっはなんですが心を込めてインタビューさせていただきます。何ととってもこのたび(2013年3月)は、ハンガリーで大変権威のある賞を3つも受賞されたそうで、誠におめでとうございます。

ベルケシュ 一つめはハンガリー政府より「ハンガリー国騎士十字勲章」を、長年に渡るクラリネット奏者、指揮者、教育者としての功績が認められ「1848年革命と自由戦争記念日(3月15日)」の前日に受勲しました。正確に言うと当日は大雪で車が動かず、地方にいた私は授勲式が挙行されたブダペストの歌劇場には行けなかったのですが(苦笑)。その翌日の祝祭日に受賞したのがジュール市「プロ・ウルベ賞」。これはジュール・フィルハーモニー管弦楽団の芸術監督に就任してから4年間の実績が評価され、市から贈られたもの。こちらは、無事当日賞状を手にすることができました。最後に受賞したのが、バルト

クの誕生日(3月25日)にいただいた「バルトーク・パーストリ賞」です。これはハンガリーの音楽家にとって最高権威にあたる賞です。

若き日を 共にした仲間たち

福井 40数年間、世界的クラリネット奏者として、後には指揮者としても活躍してきた先生の足跡が表彰され、武蔵野としても大変嬉しく思います。先生はまさに少年期から、同世代の「ハンガリーピアノ三羽鳥」といわれたゾルタン・コチシュ、デジー・ラーンキ、アンドラーシュ・シフラと共に、日々切磋琢磨されたんですね。

ベルケシュ 「三羽鳥」は30数年前、日本でも大人気を博したそうですね。もちろん現在でも、3人それぞれが巨匠の域に達して世界中で活躍しています。最初の出会いは、才能のある若い音楽家を特別に援助育成する「モーツァルトクラブ」に私が入った時で、同級生のコチシュとラーンキ、そして一つ下のシフラとの付き合いが



▲授与された3つの賞のメダルを前に

始まりました。11歳か12歳の時ですから、もう半世紀も前の話ですね。その後、14歳の時にバルトーク音楽院(高等学校)に入学しますが、ドイツ語を選択した私とランキは同じクラス、英語クラスのコチシュは隣のクラスでした。その時の4年生(ハンガリーの高校は4年制)に現在武蔵野の同僚、コントラバスのティバイ先生もいました。そして1年後にシフが入学することになります。

福井 その頃から、彼らとは良き友そしてライバルとして、シノギを削っていたわけですね。

ベルケシュ 朝早くから学校に来て練習していました。ただし授業にはほとんど出ずに…学校にはいましたが、教室にはいないという(笑)。学校側も、とにかく演奏さえ優れていれば容認というか、放任というか(笑)。その代わり、たまに学校に要人が来ると校長から呼び出しがあって、「コチシュやランキとお客様の前でクラリネット・ソナタを吹きなさい」。その結果、我々は普段から散々練習していますから、お客様は感心してくださり、学校側も喜ぶという図式で…。でも、この話は武蔵野の広報誌には載せられませんね(笑)。直昭先生に任せます。



▲ ジュール・フィルハーモニー管弦楽団を指揮するベルケシュ教授

▼ デジュ・ランキ(左)と共演
(1993年10月8日 ベートーヴェンホール)



▲ ゴルタン・コチシュ(右)と共演
(1993年10月14日 ベートーヴェンホール)

福井 はい、おそらく載せないと思います(笑)。そしてバルトーク音楽院卒業後は、武蔵野とも交流があるリスト音楽院に進まれます。

ベルケシュ リスト音楽院では先の彼らにつづき、これまた武蔵野にも何度も客員教授として着任しているイエネ・ヤンドー先生が輪に加わります。彼とも既に知り合いでしたが、ブダペストには住んでいなかったのが大学から同級生となりました。

“三羽鳥”らとの共演

福井 “三羽鳥”らとの、プロとしての演奏活動についてお聞かせください。

ベルケシュ 私は高校時代の16歳の時に、バルトークの「コントラスト」をランキとレコーディングしてレコードをリリースしましたが、その2年後、今度はコチシュと同曲を収録しました。この録音は現在でもフンガロトン社のCD「バルトーク全集」として聴くことができます。

福井 先生のCD「コントラスト」は、'95年にナクソス社からリリースされた盤(ヤンドー先生らと共演)が、グラミー賞の室内楽分野にノミネートされてゴールドメダルを受賞しています。

ベルケシュ 「コントラスト」はおそらくクラリネット奏者にとってテクニック、リズム、音楽性といった多面的な意味で最高峰の曲であると思い

ます。この曲に限りませんが、少年期から卓越した才能を持つ同世代のピアニストや器楽奏者たちと共に練習し、ジェルジュ・クルタークを始めとするこれまた超一流の教授たちの指導を得て多くの演奏会を重ねたことは、私にとってかけがえのない経験となりました。今でも彼らと会うと、その当時のことが走馬灯のように蘇ります。

福井 彼らとはイタズラもかなりしたそうですね。

ベルケシュ イタズラは主にコチシュが担当です(笑)。それこそここでは言えないような事もよくやりました。あまり良いピアノを自宅に持っていなかったコチシュは、私や祖母がまだ寝ている日曜の早朝からわが家に上がりこみ、リビングにあるグランドピアノをガンガン弾いてました。少年期から現在までで、「三羽鳥」のうちではコチシュとの共演が最も多いですかね。デュオや室内楽、あるいは指揮者とソリストとして500回くらいは共演しています。次はランキで、100回くらい。2週間前も私の指揮で、彼がベートーヴェンの4番の協奏曲を演奏しました。彼らとは武蔵野でも共演しましたね。また、シフとも50回ほどは共演しています。

福井 ベルケシュ先生は、リスト音楽院在学中の1972年、ジュネーブ国際コンクールでシルバーメダルを獲得し、卒業後ハンガリー国立歌劇場管弦楽団、ブダペスト・フィルハーモ

ニー管弦楽団、ブダペスト祝祭管弦楽団の首席奏者を歴任されます。

ベルケシュ '83年に、そのようなハンガリーの主要オケの管楽器のメンバーたち、並びにコントラバスのティバイ先生とブダペスト・ウィンドアンサンブルを結成し、芸術監督になりました。これは私にとって一つの夢でした。

日本へ、 そして武蔵野へ

福井 その後'87年から指揮者の活動も始め、'92年にいよいよ武蔵野の客員教授として着任します。

ベルケシュ 前年の'91年、クラリネットフェスティバルのゲストとして来日し、NHK室内管弦楽団とモーツァルトのクラリネット協奏曲を演奏しました。そして、天皇陛下にご招待を受け皇居での御前演奏をさせていただいた日の午前中、まさに今私たちが話しているこの部屋に来たのが、私にとっての最初の武蔵野への訪問でした。それから20年以上経過しましたが、まさかこのように長いあいだ武蔵野で教えることになるとは、当時は考えもしませんでした。

福井 その間指揮者として3回、武蔵野のオーケストラと母国ハンガリーへの演奏旅行に行きました。

ベルケシュ 最初は'96年9月に武蔵

野のオケとブダペストの国立歌劇場で演奏しました。つづいて'01年は「ブダペストの春」国際音楽祭に参加しましたが、この時のソリストはヤンドー先生でした。そしてまだ記憶に新しい2009年、「日本・ハンガリー国交回復

50周年記念交流事業」として行われたリスト音楽院との交歓演奏旅行は、武蔵野のオケがハンガリーで、リスト音楽院のオケが日本で各々5回ほど演奏し、学生を含む両国のソリストが日本とハンガリーで共演するという、文字通りの「交流事業」となりました。直昭先生にも東京芸術劇場でリスト音楽院管弦楽団と共演してもらいましたね。

福井 素晴らしいオーケストラで、同年の武蔵野の創立80周年に華を添えていただきました。今ちょうどリスト音楽院の話が出ましたが、最近の状況はどうですか？

ベルケシュ 多くの武蔵野出身者を含む日本人が、元気に留学しています。ご存知の通りヨーロッパの経済情勢は厳しい状況ですが、そんな中でも政府は音楽に積極的に援助をしてくれています。コチシュも言っていますが、ハンガリーのオーケストラのレベルも20年前からまた上がってきました。本誌が出る頃には終わっていますが、6月には「椿姫」で国立歌劇場が来日公演を行います。



▲ 本学管弦楽団のハンガリー公演
(2009年9月23日 リスト音楽院大ホール／ブダペスト)

皆さんの 「黄金時代」を大切に

福井 先生は9月の武蔵野オケの定期演奏会(東京オペラシティ)と演奏旅行(島根・鳥取)で指揮をされます。

ベルケシュ ラフマニノフのピアノ協奏曲第2番や、チャイコフスキーの「くるみ割り人形」組曲、ボロディン「だったん人の踊り」等の名曲でプログラミングされています。皆様ぜひお運びいただければ幸いです。

福井 最後に武蔵野の学生にメッセージを。

ベルケシュ 私は20年以上にわたり武蔵野で教えてきました。本当に感謝していますし、お陰さまで刺激的な毎日を過ごさせていただいています。武蔵野の学生は、皆勉強することに対し「モラル」があり、また「ガンバル」ことができます。皆さんは、今でも分かっているかもしれないけれど、おそらく卒業してから一層「いかに自分たちが武蔵野で恵まれた環境や先生たちに囲まれていたか」ということに気がつくと思います。そんな自らの現在、いわば「黄金時代」をより充実させることができるよう、日々努力してくださいね。



▲ 室内楽のタベ(K. ベルケシュ、深山尚久、ドル恵理子)
(2012年6月21日 ベートーヴェンホール)

新しい顔を迎えて行われた春の学園行事

春爛漫の4月、武蔵野音楽学園では入学式、入園式が次々に挙行政成25年度の学事がスタートしました。新入生を迎えた各キャンパスでは春の学園行事が順調に進んでいます。

大学では現在進行中の「江古田新キャンパスプロジェクト」に伴い、大学1～4年までの全学年が江古田キャンパスに集いました。一層活気に満ちたキャン



パスでは、先輩達が新入生歓迎会を企画①。先輩方の素晴らしい歓迎演奏会や先生方を囲んでの交流会、そしてパーティー、クラブ団体によるクラブPRなど、楽しく有意義な内容に、新1年生にとってはこれから始まる大学生活への大きな励みとなったようです。

高校では、入間キャンパス内のグラウンドで体育祭が開催されました。保護者の皆さんも熱心に応援する中、2年生が息の合ったチームワークで、対抗リレーや綱引きで勝利、総合優勝を手に入れました。全学年若さ溢れるパワーを発揮した一日でした。また5月下旬には、2年生が九州地方へ修学旅行に出かけました②。福岡・天満宮を皮切りに、長崎のハウステンボス、また市内で

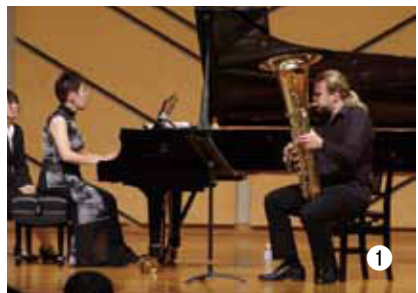


は路面電車でグラバー園、原爆資料館、大浦天主堂、出島を巡り、最終日には佐賀で田焼の絵付け、手びねりを体験。各地方特有の歴史と文化に触れる、充実した旅行となりました。一方、1、3年生は飯能市の名栗川上流にあるキャンプ場で、校外学習を行いました。河原で飯盒を炊き、さまざまな料理を生徒と先生と一緒に創意工夫して作りしました。

3つの附属幼稚園では、公園や遊園地へ春の遠足に行ってきました。広々としたグラウンドで親子ゲームをしたり、かわいい子ウサギを抱っこするなど、子どもたちは大満足の様子。みんなで一緒に食べる愛情たっぷりのお弁当は、格別においしかったことでしょう。

多彩な春期公開講座シリーズ&新人演奏会

本年度の春期公開講座シリーズの第1弾として、4月17日、モーツァルトホールにおいて **アンドレアス・ホフマイヤー** (Tub.) コンサート&マスタークラスが開催されました①。〔ピアノ=小池ちとせ/通訳=佐藤潔〕コンサートでは、シューマン：アダージョとアレグロ Op.70、テレマン：12の無伴奏フルートのための幻想曲より No.2などをチューバで演奏し、素晴らしい音色を披露しました。リンツ・ブルックナー管弦楽団の首席チューバ奏者を務め、ヨーロッパ各地の著名なオーケストラ



で演奏している傍ら、ザルツブルグ・モーツァルトウム音楽院教授も務める氏のマスタークラスでは、演奏技術などがレクチャーされ、学生を含め聴講者は熱心に耳を傾けていました。

これに続いて、本学ベートーヴェンホールにおいて、本学客員教授らによる演奏会が相次いで開催されました。●5月21日、**クルト・グントナー** (Vn.) & **藤原由紀乃** (Pf.) デュオ・リサイタル。プログラムは、フランク：ヴァイオリン・ソナタ イ長調、ブゾーニ：ヴァイオリン・ソナタ第2番ホ短調 Op.36a、R. シュトラウス：ヴァイオリン・ソナタ 変ホ長調 Op.18。円熟味溢れる演奏を情緒豊かに聴かせました②。

●6月11日、**ロバート・ダヴィドヴィッチ** (Vn.) 室内楽のタペ〔共演=岡崎悦子 (Pf.)、増田加寿子 (Vn.)、シャンドール・ナジ (Va.)、前田善彦 (Vc.)〕プログラムは、ベートーヴェン：ヴァ



イオリン・ソナタ 第1番 ニ長調 Op.12-1、弦楽四重奏曲 第14番 嬰ハ短調 Op.131、ヴァイオリン・ソナタ第9番イ長調「クロイツェル」Op.47など。ダヴィドヴィッチ教授のエネルギッシュな演奏と、息のあった華やかなアンサンブルが聴衆の心を捉えました③。

その他、6月3日には、本学音楽学の学生の企画が採択されたレインボウ21サントリーホール デビューコンサート2013 武蔵野音楽大学プロデュース「知られざるヴェルディ&ワーグナー～オペラの巨匠たちの器楽曲と歌曲～」(サントリーホール主催)が、サントリーホール ブルーローズで開催されました④。ヴェルディ作品は歌の



ないロマンス、弦楽四重奏曲、6つのロマンス、ワーグナー作品は大ソナタ イ長調、「ヴェーゼンドンク歌曲集」よりなど、今年生誕200年を迎えた両音楽家の知られざる一面にスポットを当てたプログラム構成で、企画、出演した学生が共に深い考察を重ね、この記念イヤーに相応しい公演となりました。

また、武蔵野音楽大学同窓会主催の、平成24年度音楽学部

卒業生および大学院修士課程修了生による新人演奏会がそれぞれ開催され、これまでの研鑽の成果を披露して、満員の会場から温かく盛大な拍手をいただきました。

(出演者はP. 3、4をご覧ください。)



▲企画、出演した学生一同 (写真提供：サントリーホール)

附属音楽教室の生徒が ウィーン少年合唱団にインタビュー！

去る4月25日、2013年の来日ツアー中の「ウィーン少年合唱団」メンバーに、本学附属音楽教室の生徒たちがインタビューを行いました。音楽の話から、子どもらしいアニメの話まで、笑顔あふれる和やかな雰囲気の中、同じ音楽を勉強しているもの同士、心が響きあう時間となりました。

「とても楽しかった！」と目を輝かせながら、生徒たちは、同世代のメンバーが世界中でプロとして活動している姿に大いに刺激を受け、将来を夢



見る貴重な経験となりました。

このインタビュー内容は5月12日発行の毎日小学生新聞に掲載されました。

表紙の顔



クリストファー・ マーティン氏

武蔵野音楽大学とクリストファー・マーティン氏との出会いは、氏が2006年にシカゴで行われた「第60回ミッドウェスト・クリニック」で武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブルの演奏会に、客演ソリストとして出演した時でした。この度、7月に開催される本学ウィンドアンサンブル定期演奏会のソリストとして来日。再び協演が実現しました。

マーティン氏は'97年にイーストマン音楽学校を卒業。フィラデルフィア管弦楽団の副首席奏者を経て、アトランタ交響楽団の首席奏者として活躍。その後'05年には、シカゴ交響楽団の首席奏者に任命され「アドルフ・ハーセス・チェア」に就き、世界的なトランペット奏者として活躍されています。シカゴ交響楽団では、ソリストも度々務め、近年ではマーティン氏とシカゴ交響楽団のために書かれた作品も演奏、またオール・フランス・プログラムと称した演奏会で、アンドレ・ジョリヴェとアンリ・トマジのトランペット協奏曲を演奏しています。

彼のサウンドは、アトランタ交響楽団での収録や、最近発売されたシカゴ交響楽団プラスのライブ版、スティーヴン・スピルバーグの映画「リンカーン」で聴くことができます。

現在は、演奏活動の傍らイリノイ州にあるノース・ウェスタン大学でも教鞭をとっています。

※本学ウィンドアンサンブル演奏会の詳細はP.14をご覧ください

REPORT ① LOOK at TOMORROW 江古田新キャンパスプロジェクト

武蔵野音楽大学では、昨年、さらなる教育・研究環境の向上を目指した「武蔵野音楽学園江古田新キャンパスプロジェクト」を立ち上げ、平成29年度の新校舎落成に向けて始動しています。今号からプロジェクトの進行状況、修学関連のお知らせなどを随時このコーナーでレポートいたします。

新しいキャンパスは閑静な住宅地に囲ま

れた周辺環境に配慮し、地下1階に掘り下げた中庭上の広場「サンクンガーデン」を特徴としています。このキャンパス中央に設けたサンクンガーデンに面して図書館や食堂といった学生生活の拠点となる機能を配置することで、学生同士あるいは学生と教員の交流の場として機能します。正面に設けた大階段は屋外コンサート時の観客席としても利用できます。

このサンクンガーデンを囲む形で最新設備を備えた教室や、最適な音響環境を備えたレッスン室、会議室など機能毎に別れた建物が並びます。

また日本で初めての本格的コンサートホールである大ホール「ベートーヴェンホール」は、優れた音響効果はそのままに、より使いやすいホールとして生まれ変わります。また室内楽やレクチャーなどに使用していた中ホール「モーツァルトホール」を建て替えるほか、サロン風ホールや合奏室を整備し、総合的な演奏環境を再構築します。機能的に洗練・整備された魅力ある最新のキャンパスをご期待ください。

※江古田新キャンパスの設計・施工は、東京スカイツリーを建設した株式会社大林組が行います。

武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、寄附金に対する税額控除制度の恩典が与えられたことに鑑み、江古田新キャンパス建設基金、福井直秋記念奨学基金並びに演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々よりご寄附をいただきました。ここに芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。 学校法人 武蔵野音楽学園

※ご芳名（五十音順）は、平成25年2月1日から4月30日までに寄附いただいた方々です。それ以降の方々は、次号にて掲載させていただきます。また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきます。何とぞご了承ください。

【同窓生】

今津重紀様 内田裕見子様 川口俊子様 川崎盛徳様 河村公江様 坂爪三千代様 首藤法雲様 関 齊様 竹村 正様
野里直子様 原口恵美子様 藤原 一様 守重暢子様 森本佑子様 財団法人国際沛思文教基金會 李 宜蓉様 昭和54年
入学同期会出席者一同様 美苗会有志様

【在学生・同ご父母】

伊東立雄様 上田公一様 江中賢一様 太田節雄様 大塚祐一様 小幡 賢様 後藤和彦様 新里健一様 鈴木英二郎様
鈴木正志様 須田富士子様 高須 稔様 田島正弘様 平石 実様 本間敬二様 山崎 彰様

【役員・教職員・一般・他】

池田 温様 今川映美子様 上田 順様 岡崎悦子様 岡崎耕治様 門田明香様 清野美佐緒様 熊井千恵美様 熊倉功二様
黒瀬美奈子様 古池 好様 小林五郎様 齋藤未奈様 清水直美様 白石晃子様 相馬清美様 平良栄一様 田内千代様
高橋大海様 竹浪愛子様 奈良滯子様 林 孝治様 原田知子様 樋口達哉様 久富綏子様 福井直敬様 藤枝照久様
藤波喜和子様 前川慎一郎様 前原信子様 増崎靖子様 萬歳典子様 三村隆文様 宮崎幸次様 村上 諭様 守重信郎様
矢嶋佳子様 安富 洋様 吉岡千賀子様 吉川 修様 (他に匿名を希望される方17名)

栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）

- ハンガリー国騎士十字勲章受章 (順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの)
●ハンガリー・ジュール市よりプロ・ウルベ賞受賞
●バルトーク・パーストリ賞受賞
カールマン・ベルケシュ（本学客員教授）
●ゲルダ・リスナー国際声楽コンクール2013（アメリカ）トップブライズ（優勝）受賞、カーネギーホールにて受賞者演奏会に出演
大西 宇宙（平成20年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程修了）
●第10回 ルイーゼ・チェリッテリ教授追悼国際音楽コンクール（イタリア）オペラ・声楽部門 第1位入賞
金澤 澄華（平成17年大学院修士課程修了声楽専攻）
●第1回 The Harp 21 Century 国際コンクール（ロシア）
第1位入賞 原 日向子（大学1年次在学ハープ専攻）
第2位入賞 佐藤 理絵子（平成24年大学卒ハープ専攻 本高校卒）
●第9回 藤沢オペラコンクール 本選
第2位入賞 伊藤 晴（平成16年大学院修士課程修了声楽専攻）
奨励賞受賞 三戸 大久（平成12年大学卒声楽専攻）
奨励賞受賞 杉山 由紀（平成20年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程修了）
●二期会オペラ研修所修了時に最優秀賞、川崎静子賞、所長賞受賞 杉山 由紀（平成20年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程修了）●札幌コン
サートホール（Kitara）主催 第16回リスト音楽院セミナー 最優秀受講生、「ブダペスト春の音楽祭2014」（ハンガリー）にてリサイタル開催予
定 青木 佑磨（平成24年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程1年次在学）●第10回 クラリネットアンサンブルコンクール 一般B部門
第1位入賞、グランプリ受賞 石田 勝（大学4年次在学クラリネット専攻）／櫻井 一暁（大学4年次在学クラリネット専攻）／佐藤 義人（大
学4年次在学クラリネット専攻）／町田 貴紀（大学4年次在学クラリネット専攻）●第15回 “万里の長城杯” 国際音楽コンクール 管楽器部門
大学の部 第1位入賞 大坪 俊樹（大学4年次在学サクソフーン専攻）、ピアノ部門 大学の部 第2位入賞 竹内 優香（大学1年次在学
ピアノ専攻）●第24回 全日本ジュニアクラシック音楽コンクール 全国大会 金管楽器部門 大学生の部 第2位入賞（1位なし） 青木 大
河（大学1年次在学トロンボーン専攻）、ピアノ部門 大学生の部 第4位入賞（1～3位なし） 南 沙紀（大学4年次在学ピアノ専攻）、ピアノ部
門 大学生の部 審査員賞受賞 和田 美優希（大学1年次在学ピアノ専攻 本高校卒）、ピアノ部門 大学生の部 奨励賞受賞 田中 舞（大学1
年次在学ピアノ専攻 本高校卒）●第25回 ハイメスコンクール＜声楽部門＞ 第2位入賞 土屋 優子（平成22年大学卒声楽専攻 本大学院
修士課程修了）●第15回 九州音楽コンクール ピアノ部門 大学生クラス 銀賞受賞 迫口 真理香（大学3年次在学ピアノ専攻）●第5回
2013年岐阜国際音楽祭コンクール 専門コース 弦楽器部門一般 第3位入賞（1、2位なし） 出町 芽生（平成24年大学卒コントラバス専攻）
●第4回 ジュラ・キシュ国際ピアノコンクール 一般部門 第3位入賞 伊藤 瞳（平成24年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程2年次在学）

※上記の他多数。大学ホームページをご覧ください。

武蔵野音楽大学同窓会 平成25年度 全国総会のお知らせ

平成25年度、武蔵野音楽大学同窓会全国総会が、来る8月25日（日）長崎県長崎市「ホテルニュー長崎」を会場に開催されます。16時から総会、引き続き、本学ヴィルトゥオーソ学科の学生による記念演奏会、18時15分から懇親会が行われます。また総会に合わせて、いくつか観光が企画されています。多数の皆様のご参加をお待ちしております。

平成25年度7月～10月 演奏会のお知らせ

ケマル・ゲキチ ピアノ・リサイタル 曲目＝ショパン：4つのスケルツォ、ワーグナー＝リスト：《タンホイザー》序曲 S422/R275、リスト：ピアノ・ソナタ ロ短調 S178/R21	7月 3日(水) 18:30 ベートーヴェンホール (江古田)	¥1,000 (全席自由)
武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル演奏会 指揮＝レイ・E. クレーマー トランペット独奏＝クリストファー・マーティン (シカゴ交響楽団首席奏者) 曲目＝ジュー＝ブクマックス・フロム・ジャパン (世界初演)、ヴァルツィック：トランペットとウィンドアンサンブルのための協奏曲「ガウチョ」(日本初演) 八木澤教司：眩い星座になるために… (2013年改訂版・初演)、2013年度全日本吹奏楽コンクール課題曲より 他	7月11日(土) 18:30 浦添市でだこホール (沖縄県) 7月13日(日) 16:00 沖縄市民会館 (沖縄県) 7月16日(火) 18:30 東京芸術劇場 コンサートホール	一般¥1,500 / 小・中・高¥1,000 (全席自由) 一般¥1,500 / 小・中・高¥1,000 (全席自由) ¥1,500 (全席指定)
武蔵野音楽大学管弦楽団演奏会 指揮＝カールマン・ベルケシュ ピアノ独奏＝本学学生オーディション合格者 大飼まお (音楽学部ヴィルトゥオーソ学科2年) 10日 9月15日(日) 15:00 とりぎん文化会館「梨花ホール」(鳥取県民文化会館／鳥取市) 清水弘治 (大学院ヴィルトゥオーソコース1年) 14日、15日 曲目＝ショスタコーヴィチ：祝典序曲 Op.96、ラフマニノフ：ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 Op.18 チャイコフスキー：《くるみ割り人形》組曲 Op.71a、ボロディン：《イーゴリ公》より「ダッタン人の踊り」	9月10日(火) 19:00 東京オペラシティ コンサートホール 9月14日(土) 13:00 島根県芸術文化センター「グラントワ」(益田市)	¥1,500 (全席指定) 一般¥1,500 / 学生¥1,000 (全席自由) 一般¥1,500 / 学生¥1,000 (全席自由)
武蔵野音楽大学附属高等学校音楽科 在校生と新卒業生によるコンサート ※お問合せ＝武蔵野音楽大学附属高等学校 TEL.04-2932-3063	9月28日(土) 18:30 王子ホール	¥2,000 (全席自由)
武蔵野音楽大学室内合唱団演奏会 指揮＝栗山文昭 曲目＝バーバー：アニュス・デイ、ブラームス：4つの四重唱曲 林光：舞台のためのカンカータ 安部公房《ブルートのわな》より「鼠たちの伝説」 演出＝恵川智美 照明＝奥畑康夫 台本・作詞＝佐藤信	9月30日(日) 18:30 ベートーヴェンホール (江古田)	¥1,000 (全席自由)
武蔵野音楽大学教員による室内楽コンサート 出演＝小池ちとせ (Pf.)、深山尚久 (Vn.)、安富洋 (Va.)、三宅進 (Vc.)、ツオルト・ティバイ (Cb.) 曲目＝モーツァルト：ピアノ四重奏曲 ト短調 K.478、シューマン：ピアノ四重奏曲 変ホ長調 Op.47 シューベルト：ピアノ五重奏曲 イ長調 Op.114, D667「ます」	10月 8日(火) 18:30 ベートーヴェンホール (江古田)	¥1,000 (全席自由)

お問合せ ●武蔵野音楽大学江古田キャンパス演奏部 TEL.03-3992-1120

※講師の病気、その他やむを得ない事情により、出演者・曲目等を変更する場合がありますので、あらかじめご了承ください。

※チケットは武蔵野音楽学園ホームページ <http://www.musashino-music.ac.jp/> でもご予約ができます。

平成25年度 武蔵野音楽大学・武蔵野音楽大学附属高等学校 夏期講習会のお知らせ

講習会名	実施期間	申込受付期間	会場
音楽大学受験講習会※1	第1期 7月28日～7月31日 第2期 8月 2日～8月 5日	7月1日～7月12日(消印) 7月1日～7月17日(消印)	江古田 キャンパス
高校音楽科受験講習会※1	7月28日～7月30日	7月1日～7月12日(消印)	
社会人のための 夏期研修講座※2	7月31日～8月 2日	7月4日～7月18日(消印)	
免許法認定講習	7月25日～8月 5日	7月1日～7月12日(消印)	

※1 今年度より受験講習会では、専攻実技のレッスンについて担当講師を希望することができます。

※2 社会人のための夏期研修講座は、下記のⅠ・Ⅱより各1講座、Ⅲより2講座を選択します。

Ⅰ ●中学生・高校生のためのピアノ指導法

- 声楽指導法(作曲家V.ベッリーニその美の本質を探る、生誕200年を迎えたヴェルディの「レクイエム」について、総合芸術オペラについて―歌手の目線から、オペラ公演当日を迎えるまでの過程―)
- 編曲法の実践(ピアノ曲を吹奏楽に編曲するための基礎知識の習得)
- 音楽科指導の実践(中学校を中心とした教育課程と音楽科学習指導の実践)

Ⅱ ●小学生のためのピアノ指導法

- 器楽合奏(打楽器アンサンブルへの導入とその指導法について)
- ソルフェージュ (コードネームを中心とした、旋律の伴奏付けの実践演習)
- 教材研究(ロマン派から近代の名曲について「作曲家からのメッセージ」を考えてみる)

Ⅲ ●合唱指導

- 講話(生誕200年を迎えたヴェルディとその作品、音楽と音響の深い関係)
- カール・オルフの音楽教育
- 個人レッスン(ピアノ、フルート、リコーダー、声楽のうちから1種類を選択)
- パイプオルガンのたのしみ「パイプオルガン入門」
- 音楽療法入門 ●楽器学入門「ヴァイオリンの歴史」

※上記の他に行われる演奏会は、受講者全員を対象としています。

◎実施日程、会場、内容が昨年と変更となっている講習会があります。詳細は要項でご確認ください。

◎講習会要項の請求は、武蔵野音楽学園広報企画室(TEL.03-3992-1125)またはホームページ、モバイルサイトにしてお申し込みください。(要項は無料、郵送料は学園が負担します)

◎ホームページ：<http://www.musashino-music.ac.jp/> ◎モバイルサイト：<http://musaon.jp/>

平成26年度 入学試験要項請求について

武蔵野音楽大学の各入学試験要項は、江古田キャンパスで取り扱っています。郵送をご希望の方(平成26年度受験対象者)には、無料でお送りいたします。本学園ホームページ、モバイルサイトの「資料請求フォーム」からご請求ください。お電話でのお申し込みは、氏名、住所、電話番号、および附属高校、大学1年次、大学3年次編・転入、大学院、別科の別をお知らせください。

なお、夏期受験講習会を受講の方には講習期間中に配付します。

【お問合せ・請求先】

武蔵野音楽学園広報企画室

〒176-8521 東京都練馬区羽沢1-13-1

TEL.03-3992-1125

学園ホームページ

<http://www.musashino-music.ac.jp/>

モバイルサイト <http://musaon.jp/>

編集後記

レスリングの吉田沙保里選手には、“まっすぐ”という形容がよく似合う。

まっすぐな性格、まっすぐな生き方、そして夢に向かってまっすぐ突き進む姿勢——見習いたいものです(編)。

ポストホルン

チェコ 1866年モデルの複製品 ベル直径12cm

豊かな緑と瀟洒な建物が、落ち着いた雰囲気醸し出すドイツの街並み——その中で、ひときわ人目を惹くのが、愛らしいマークが付けられた黄色いボックスである(写真下)。これはドイツ郵便局のポストで、付けられたマークはポストホルン、すなわち郵便馬車のホルンを表している。18～19世紀のドイツを始め、ヨーロッパ各国では手紙を配達する郵便馬車の御者は小さなホルンを携帯し、馬の手綱を操りながらそれを鳴らすことで、郵便の到着を告げた。人々はホルンの音を聞くと、大切な人からの便りを少しでも早く受け取ろうと、われ先に家から出て行ったという。ポストホルンの音は当時の人々が心待ちにしていた響きであり、その想いが、ドイツ郵便局のシンボルとして現在に残されているのである。

ホルンは、その「角」を表す語源の通り、まず角笛として誕生した。角笛は狩猟民族にとって狩の合図を告げる重要な楽器で、その後金属が使われ円形に巻かれるようになって、狩猟ホルンとして人々の生活に定着した。巻きの大きなホルンは肩にかけ馬上で鳴らされ、やがてオーケストラに採用され現在のホルンへと発展していった。一方、巻きの小さなホルンは郵便馬車で鳴らされ、この楽器は現在のホルネットへと発展した。

写真の楽器は、ポストホルンが広く使われていた



1866年のモデルの複製品で、ラッパの部分には双頭の鷲の紋章と「K & K 郵便局所有 ブルノ 1866年」を意味する文字が刻まれている。ポストホルンは20世紀に入り、馬車から自動車に配達手段が代わることで姿を消すが、この楽器は、当時の人々が胸をときめかしたであろう響きを今に再現してくれる。

(武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵)



江古田キャンパス楽器博物館休館のお知らせ

「江古田キャンパス楽器博物館」は、リニューアルオープンに向けて、現在休館中です。なお、「人間キャンパス楽器博物館」及び「バルナソス多摩楽器展示室」は通常通り開館しています。休館中は、ご迷惑をおかけいたしますが、ご理解いただきますよう、お願い申し上げます。

❖ 目次 ❖

- まだ、夢の途中 吉田沙保里 ①
- 卒業生インタビュー ⑤
- お客様の笑顔のために 吉金寛文
- 音楽の万華鏡 もう一つの記念年 植崎洋子 ⑦
- 海外音楽事情 ⑧
- 彩りに満ちた私の音楽人生 カールマン・ベルケシュ
- MUSASHINO NEWS ⑪
- ❖ 新しい顔を迎えて行われた春の学園行事
- ❖ 多彩な春期公開講座シリーズ&新人演奏会
- ❖ 附属音楽教室の生徒がウィーン少年合唱団にインタビュー!
- ❖ 江古田新キャンパスプロジェクト REPORT ①
- ❖ 武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々
- ❖ 栄冠おめでとう! (コンクール入賞者等)
- ❖ 武蔵野音楽大学同窓会平成25年度全国総会のお知らせ
- ❖ 平成25年度7月～10月 演奏会のお知らせ
- ❖ 平成25年度夏期講習会のお知らせ
- ❖ 平成26年度入学試験要項請求について

武蔵野音楽大学大学院

博士前期課程・博士後期課程

武蔵野音楽大学

武蔵野音楽大学別科

武蔵野音楽大学附属高等学校

武蔵野音楽大学第一幼稚園

武蔵野音楽大学第二幼稚園

武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園

附属音楽教室 江古田・人間・多摩

❖ 発行 ❖

学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1
TEL.03-3992-1121 (代表)

人間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728
TEL.04-2932-2111 (代表)

バルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1
TEL.042-389-0711 (代表)

<http://www.musashino-music.ac.jp/>

2013年7月1日発行 通巻第106号



モバイルサイト
<http://musaon.jp/>